# 『万葉集』における隔絶感の表現

## ――中臣宅守歌の「山川を中にへなりて」をめぐって――

田野順也

## 一

『万葉集』の歌に、会いたいと思う相手に、何らかの遮るものがあって会えない、とうたうものがある。この隔絶感をうたうものの中に、「山川を中にへなりて」（15・三七五五、15・三七六四）という表現がある。本稿では、この表現がどのような形で形成されたかについて考察していきたい。

まず検討する歌を挙げておく。①

中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌（の内）

A愛しと　我が思ふ妹を　山川を中にへなりて［山川乎奈可尓敝奈里弖］　安けくもなし　（15・三七五五、中臣宅守）

B山川を中にへなりて［山川乎奈可尓敝奈里弖］　遠くとも　心を近く　思ほせ我妹　（15・三七六四、中臣宅守）

中臣宅守は、罪を得て越前国に流された。その時、中臣宅守が配流地から都の狭野弟上娘子に贈った歌である。「山川を中にへなりて」という表現は、中臣宅守のこの二例以外にはみえない。しかしAとBのように、「山川」が二人の間を遮るものとする、同じような表現は、『万葉集』にあと三例ある。

笠女郎贈大伴宿祢家持歌廿四首（の内）

C心ゆも　我は思はずき　山川も　隔たらなくに［隔莫国］　かく恋ひむとは　（4・六〇一、笠女郎）

哀傷長逝之弟歌一首并短歌（の長歌）

D…玉桙の　道をた遠み　山川の　へなりてあれば［敝奈里氐安礼婆］　恋しけく　日長きものを　見まく欲り　思ふ間に…　（17・三九五七、大伴家持）

挽歌一首并短歌（の長歌）

E…大君の　命恐み　鄙離る　国を治むと　あしひきの　山川へなり［山河阻］　風雲に　言は通へど　直に逢はず　日の重なれば…

（19・四二二四、大伴家持）

「山川」が二人の間を遮るものとしてうたわれている歌が、天平期以降に集中して現れることは注目すべきことだろう。用例を詳しくみると、Cには他と異なり、「へだたる」という動詞が用いられている。「へだたる」と「へなる」が意味の上で近いかどうかが問題となる。このことには注意しておく必要がある。

この表現の形成を検討していく際に、二つのことをまず整理しておく必要がある。一つは、この表現の中に含まれる「へなる」という語の意味をどう考えるか、ということである。もう一つは、この表現の形成以前に、どのような隔絶感の表現があったか、ということである。以下では、先にこの二点について述べることにする。

## 一

まず「へなる」という語の意味について検討していくことにする。以下に諸説を列挙する。

①ヘナルの意味はどこまでもヘダタルと同一である。

（境田四郎氏「萬葉集に於ける隔の訓義」[2]）

②隔だたる（『萬葉集私注』[3]）

③隔ててある（窪田空穂氏『萬葉集評釈』[4]）

④へ（隔て）ニ成ル（木下正俊氏『萬葉集全注　巻第四』[5]）

⑤隔てとなる（『新日本古典文学大系　萬葉集』[6]）

諸説は、「へだたる」と同じとするか（①～③の説）、そうでないかに分類できる。また「へなる」の語構成をどうとらえるかが問題となる。④、⑤は、それを考慮した意味のとり方をしている。「へなる」の語構成について、①で詳しく述べられている。境田氏は、『古事記伝』の、

幣陀都と云は、重を立と云ことなれば、本は重と同じけれども、其に二の意あり、一には重をなして畳ぬる意、二には物と物との間を塞絶つ意にて、隔字は此意に当たる字なり

（二十八之巻、日代宮三之巻、「多々美許母」）

を引いて、

ヘダツ、ヘナルのヘは、一重二重のヘと同じ語原に属するもので、「一仕切りのもの」といふ意味を現はしてゐると考へられる。

と述べた上で、先に挙げた結論を述べられている。

「ひとへ」の「へ」を表記する場合、『万葉集』では、

在久邇京思留寧楽宅坂上大嬢大伴宿祢家持作歌一首

F一重山［一隔山］　へなれるものを［重成物乎］　月夜良み　門に出で立ち　妹か待つらむ

（4・七六五、大伴家持）

高丘河内連歌二首（の内）

G故郷は　遠くもあらず　一重山［一重山］越ゆるがからに
　思ひそ我がせし　（6・一〇三八、高丘河内）

のように、「一隔」、「一重」となっている。このように、「隔」と「重」が同じ「へ」の訓仮名として用いられている。「隔」の仮名はその意味を生かした表記と考えられるので、「ひとへ」の「へ」を「隔て」の意味として考えることができる。また「へなる」の表記の中に、Fの例のように「重成」とあることから、「へなる」を「へ」と「なる」に分けて考えることができる。このことから、境田氏の説にあるように、「へ」を「一仕切りのもの」とし、「へ」と「なる」に分けて、「へなる」の意味を考えることには従える。しかし、「へだたる」と同じと考えることに対しては検討の必要がある。「へだたる」の『万葉集』における用例は、先に掲げた、

笠女郎贈大伴宿祢家持歌廿四首（の内）

C心ゆも　我は思はずき　山川も　隔たらなくに［隔莫国］かく恋ひむとは　（4・六〇一、笠女郎）

と次の歌しかない。

大伴坂上郎女七首（の内）

H海山も　隔たらなくに［隔莫国］なにしかも　目言をだにも
　ここだ乏しき　（4・六八九、大伴坂上郎女）

二例とも天平期以降の用例である。同時期には、「へなる」も用いられている。このことから、やはり「へだたる」と「へなる」には、意味の違いを考えたほうがよいと思われる。

また『万葉集』巻十三の長歌に、

鳥が音の　かしまの海に　高山を　隔てになして［障所為而］
…　（三三三三六、「挽歌」）

とある。傍線部分の「隔てになす」は、「へなる」の意味を説明するための参考になる。ただし「へなる」の構成要素は「なる」であって、「なす」ではないので、そこは考慮しなければならない。そのことを念頭に置いた上で、この用例によって、「へ」と「なる」を結ぶ格助詞は、「に」であると考えることができないだろうか。つまり「へなる」は、「へ（＝隔て）になる」の意味としてとらえることができる、ということである。しかし、こうとらえたとしても、なお問題は残る。木下正俊氏『萬葉集全注　巻第二十』⑦には、「動詞ヘナルの語義は前後の文脈によって多少の差がある」と述べられている。木下氏は、

入京漸近悲情難撥述懐一首并一絶（の長歌）

I…玉桙の　道行く我は　白雲の　たなびく山を　岩根踏み　越えへなりなば［古要敝奈利奈婆］…（17・四〇〇六、大伴家持）

にみえる「越えへなる」の「へなる」について、「離れて行く」の

意とし、

哀傷長逝之弟歌一首并短歌（の長歌）

D…玉桙の　道をた遠み　山川の　へなりてあれば［敝奈里氐安礼婆］　恋しけく　日長きものを　見まく欲り　思ふ間に…

（17・三九五七、大伴家持）

にみえる「へなる」は、「へ（隔）ニナル」とする。また、

中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌（の内）

B山川を中にへなりて［山川乎奈可尓敝奈里弖］　遠くとも　心を近く　思ほせ我妹

（15・三七六四、中臣宅守）

にみえる「へなる」は、「或る物を隔壁として離れ住む」としている。しかしBについてはここまでの検討の結果から、「へ（＝隔て）になる」と考えてよい、と思われる。

以上のことをまとめると、「山川を中にへなりて」は、「山と川を中にして（山と川が）隔てになって」という意味となる。

## 二

次に「山川を中にへなりて」という表現の形成以前に、どのような隔絶感の表現があったかについて考察したい。

最初に、本稿で検討している歌にみえる「へなる」という動詞に注目したい。先に示したように、「へなる」は「隔てになる」の意味である。したがってこの動詞に注目することで、「二人の間を遮るもの（＝隔て）」をはっきりと示す例を探し出すことができる、と考えられる。

調査対象となる動詞は、「へなる」だけではない。「へなる」を構成要素に持つ「きへなる」や、先に掲げた、

笠女郎贈大伴宿祢家持歌廿四首（の内）

C心ゆも　我は思はずき　山川も　隔たらなくに［隔莫国］　かく恋ひむとは

（4・六〇一、笠女郎）

にみえる「へだたる」もその対象となる。また「へなる」と同じく、「へ（＝隔て）」を構成要素に持つ「へだつ」も調査対象となる。

以上「へなる」「きへなる」「へだたる」「へだつ」という動詞に注目して、「山」、「川」、「山川」によって、隔絶感が表現されている場合を以下に示す[8]。

| 対象＼動詞 | へなる | きへなる | へだたる | へだつ（四段） | へだつ（下二段） |
|---|---|---|---|---|---|
| 山の場合 | 5 | 3 | 0 | 0 | 2 |
| 川の場合 | 1 | 0 | 0 | 1 | 3 |
| 山川の場合 | 4 | 0 | 1 | 0 | 0 |

〔表内の数字は、該当する歌数を示す〕

まず表中の「山の場合」と「川の場合」について、作歌時期が比

較的早い時期の歌を挙げてみる。

○山の場合

寄物陳思（の内）

J月見れば　国は同じそ　山へなり［山隔］　愛し妹は　へなりたるかも［隔有鴨］　（11・二四二〇、人麻呂歌集）

○川の場合

七夕（の内）

Kひさかたの　天つしるしと　水無し川　隔てて置きし［隔而置之］　神代し恨めし　（10・二〇〇七、人麻呂歌集）

「山の場合」、「川の場合」ともに人麻呂歌集の歌が比較的早い時期の例となる。J・Kが奈良朝以前の歌であるので、「山川の場合」に属する「山川を中にへなりて」という表現は、「山の場合」の表現、「川の場合」の表現が形成された後に現れる、といえる。

次に、「へなる」などの動詞が用いられていない、隔絶感の表現について少し触れておく。まず、山の場合に該当する歌を以下に挙げる。

田部忌寸櫟子任大宰時歌四首（の内）

L朝日影　にほへる山に　照る月の　飽かざる君を　山越しに置きて　（4・四九五、舎人吉年）

柿本朝臣人麻呂従石見国別妻上来時歌二首并短歌（の内）

M…玉藻なす　寄り寝し妹を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈ごとに　万たび　かへりみすれど　いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え来ぬ…　（2・一三一、柿本人麻呂）

山の場合に該当する歌は、『万葉集』の全時代にわたって、数多くみられる。「へなる」などの動詞以外では、「山」を「越え」るという形で、隔絶感が表現されている。「山」を「越え」ることで、「越え」た「山」が二人の間を遮るものとして認識される。先に掲げた、次の二首の歌がそのことを示すといえる。

在久邇京思留寧楽宅坂上大嬢大伴宿祢家持作歌一首

F一重山　へなれるものを［重成物乎］　月夜良み　門に出で立ち　妹か待つらむ　（4・七六五、大伴家持）

高丘河内連歌二首（の内）

G故郷は　遠くもあらず　一重山　越ゆるがからに　思ひそ我がせし　（6・一〇三八、高丘河内）

Fの「一重山へなる」、Gの「一重山越ゆ」という部分に注目する。そうすると、「一重山」が遮ることをうたうことで、「妹」への思いを述べる。「一重山」を越えることをうたうことで、「一重山」に遮られて会えない、「故郷」にいる人への思いを述べる。この二つの似た表現から、「へなる」と表現する場合だけでなく、「越ゆ」と表

現する場合でも、隔絶感を示すといえる。

次に、川の場合に該当する歌を挙げてみる。

但馬皇女在高市皇子宮時竊接穂積皇子事既形而御作歌一首

N人言を　繁み言痛み　己が世に　いまだ渡らぬ　朝川渡る

（2・一一六、但馬皇女）

七夕（の内）

O秋されば　川霧立てる　天の川　川に向き居て　恋ふる夜そ多き

（10・二〇三〇、人麻呂歌集）

紀女郎怨恨歌三首（の内）

P世の中の　女にしあらば　我が渡る　痛背の川を　渡りかねめや

（4・六四三、紀女郎）

「へなる」などの動詞に注目すると、川の場合に該当する歌が七夕歌だけとなる。七夕歌は、七夕詩との関係がある。七夕詩は、牽牛・織女が天の川を挟んで隔たっていることをうたう。このことから、川が二人の間を遮るものとして意識されることとなる。したがって、七夕詩の影響のもとに、川による隔絶感の表現が形成されたようにみえる。しかしNやPのように、七夕歌以外の歌も存在するので、川が二人の間を遮るものとする表現は、七夕詩の影響によって形成されたとは、単純にはいえない。

以上のことから、「へなる」などの動詞にかかわらない歌も含めて、山の場合、川に場合の表現が、山川の場合の表現より前に形成されていたことが分かる。

## 四

ここまで、「山川を中にへなりて」の意味、そしてこの表現の形成以前に、どのような「隔絶感」の表現があったかについて考察してきた。これを踏まえた上で、表現の形成について述べていきたい。

「山川を中にへなりて」という表現の形成に関して、廣岡義隆氏の説がある。廣岡氏は、七夕歌の流行に触れ、

「隔漢之恋」（⑤八〇六書簡）同様に一年に一度しか逢えない牽牛織女の思いを重ねつつ、それ以上に逢えない嘆きを

「隔山川恋」の思念で宅守は示したのであろう。

と述べられている。また中臣宅守は、従来「吉野讃歌」（1・三六～三九など）にみられるような神仙思想の表現で用いられてきた「山川」に、「新しい概念を盛りこんだ」とも述べている[9]。

この説には二つの点で疑問が残る。一つは「神仙思想の表現」であった「旧来の山川表現」が、全く背景の異なる贈答歌の表現とかかわるだろうか、という点である。もう一つは、七夕歌での「一年に一度しか逢えない牽牛織女の思いを重ねつつ、それ以上に逢えない嘆き」を表現するために、川の表現に山の表現を加えて、中臣宅

守が示した、という点である。山と川という二つの別々の表現を組合せることが、天平期にあったかどうか疑問が残る。

廣岡氏は川の表現が、七夕歌に基づくことを述べている。その七夕歌は七夕詩に基づいているものである。先に述べたように、川の表現全てが、七夕詩に基づくとはいえない、と思われる。しかし隔絶感の表現の背景に漢詩の影響がある、と考えられないだろうか。

そこで、漢詩の表現からの影響を考えてみることにする。山川が二人の間を遮るものとしてよまれている詩に次のようなものがある。⑩

a 山川阻且遠　別促会日長

（『文選』巻二十、魏・曹植「送応氏詩二首」第二首）

b 故郷一何曠　山川阻且難

（『文選』巻三十、晋・陸機「擬古詩十二首」第四首）

c 懸邈脩途遠　山川阻且深

（『玉台新詠』巻二、晋・張華「情詩五首」其四）

d 別日何易会日難　山川悠遠路漫漫

（『玉台新詠』巻九、魏・曹丕「楽府燕歌行二首」其二）

e 遊宦久不帰　山川脩且闊

（『文選』巻二十四、晋・陸機「為顧彦先贈婦二首」第二首）

f 遠遊越山川　山川脩且広

（『文選』巻二十六、晋・陸機「赴洛道中作二首」第二首）

g 山河隔長路　路遠絶容儀

（『玉台新詠』巻五、梁・沈約「效古」）

a～cまでが「山川阻」となっているもの、d～gは「阻」を用いずに、「山川」が遮るものと表現されているものを挙げている。この中でaは製作時期の早い詩の一つである。この詩の李善注に「毛詩曰。山川悠遠。又曰。道阻且長」とある。注に引用されている『毛詩』の部分については、以下にあげておく。

漸漸之石　維其高矣
山川悠遠　維其労矣
武人東征　不皇朝矣

（『毛詩』小雅、魚藻之什、「漸漸之石」）

兼葭蒼蒼　白露為霜
所謂伊人　在水一方
遡洄従之　道阻且長
遡游従之　宛在水中央

（『毛詩』秦風、「兼葭」）

前者の詩は、出征の際の苦しみをうたっている。そこでは「山川」は、家と「武人」とを「へだつ」ものとして、うたわれている。後者の詩は、「伊（こ）の人」に手が届かないことをうたっている。「道阻且長」という表現は、「伊（こ）の人」と自らとの距離が離れていることをいっている。以上の注記から、先に掲げた『文選』の「山川阻且

遠」は、山川に隔てられて、二人が容易には会えないことをうたうものと理解できる。このことは、後に続く句に「別れ促りて会日長し」とうたわれていることからも分かる。

このことから、『万葉集』の歌における山川の場合の表現と共通しているといえる。

稲岡耕二氏は、『萬葉集全注　巻第二』において、

M…玉藻なす　寄り寝し妹を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈ごとに　万たび　かへりみすれど　いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え来ぬ…

（2・一三一、柿本人麻呂）

を含む、「石見相聞歌」（2・一三一～一三三、一三五～一三七）の長歌二首の連作は、eを含む陸機の漢詩の構成を参考にした可能性があることを指摘している。[11] このことは「隔絶感」を表すために、いくつかの漢詩が、『万葉集』の早い時期に参考にされていたことを示す。ただしMは、山が二人の間を遮るものとして表現されている。

また先に掲げた、

挽歌一首并短歌（の長歌）

E…大君の　命恐み　鄙離る　国を治むと　あしひきの　山川へなり［山河阻］　風雲に　言は通へど　直に逢はず　日の重なれば…

（19・四二一四、大伴家持）

にみえる「山川へなり」の表記「山河阻」も、a～cにみえる「山川阻」を参考にしたものと思われる。

以上から、「山川阻」という表現は、「山川へなる」という意味で理解されていた、と考えてよい。

「山川を中にへなりて」という表現の形成の背景に、漢詩の影響があったとして、歌と漢詩との表現では異なっている点がある。歌には漢詩の表現にはない「中に」という表現がある。これをどのように考えればよいだろうか。

故爾各中置天安河而、宇気布時　（『古事記』上巻）

日神与素戔嗚尊、隔天安河、而相対乃立誓約曰　（『日本書紀』神代上、第六段一書第三）

各中挾河而、対立相挑。　（『古事記』中巻）

与埴安彦、挾河屯之、各相挑焉。　（『日本書紀』崇神十年九月）

以上は『古事記』と『日本書紀』において、同じ内容の部分を対照させたものである。「～を中に＋動詞」という文型は、『古事記』や『日本書紀』にもここに示した例のみである。またこの文型は、風土記にも見られない。傍線部分に注目すると、『古事記』では、「中」という文字を用いているが、『日本書紀』では「中」という文

字を用いていない。そこから、「中に」という表現は、より和文的な表現としてとらえることができる、と思われる。また『万葉集』にも、動詞が異なる用例として、

羈旅歌一首并短歌（の長歌）

…淡路島（あはじしま）　中（なか）に立て置きて［中尓立置而］…

（3・三八八、〈誦〉若宮年魚麻呂）

見菟原処女墓歌一首并短歌（の長歌）

…処女墓（をとめはか）　中（なか）に造り置き［中尓造置］…

（9・一八〇九、虫麻呂歌集）

寄物陳思（の内）

Q　紅（くれなゐ）の　裾引（すそびき）く道を　中に置きて［中置而］　我や通はむ　君か来まさむ

（11・二六五五）

といったようなものがある。したがって「山川を中にへなりて」の「中に」という表現が特殊なものではなく、和文的な表現としてある程度存在していたことが確認できる。

以上のことから、「山川を中にへなりて」という表現は、「山川阻」といったような漢詩の表現を受けて、さらにその表現を和文化することで形成されたものと考えられる。

中臣宅守の歌にみえる「山川を中にへなりて」は、漢詩に込められた、都を離れていく人の思いに自らを重ねながら、その漢詩の表現を取り込んだものとしてとらえておきたい。

**注**

① 以下『万葉集』の引用については、小島憲之氏・木下正俊氏・佐竹昭広氏校注・訳『日本古典文学全集　萬葉集』（小学館）によった。ただし「隔る」と表記されているところを、考察の都合上、「へなる」と表記した。また［　］は原文表記を示している。

② 境田四郎氏「萬葉集に於ける隔の訓義」、『国文国史』一巻一号、昭和10年2月。

③ 土屋文明氏著『萬葉集私注』（筑摩書房）、4・七六五「ヘナレルモノヲ」の注。

④ 窪田空穂氏著『萬葉集評釈』（東京堂出版）、4・七六五「一隔山重なれるものを」の注。

⑤ 木下正俊氏著『萬葉集全注　巻第四』（有斐閣）、4・七六五「一重山隔れるものを」の注。

⑥『新日本古典文学大系　萬葉集』（岩波書店）、15・三七五五の脚注。

⑦ 木下正俊氏著『萬葉集全注　巻第二十』（有斐閣）、20・四三〇八「天の川隔りにけらし」の注。

⑧ 各項目について該当する歌の番号を以下に示す。

○山の場合

（奈良朝以前）

11・二四二〇（人麻呂歌集）、18・四〇七三（「古人云」）

（天平五年以前）

4・六七〇（湯原王）

（天平五年以降）

4・七六五（大伴家持）、8・一四六四（大伴家持）、17・三九六九

（大伴家持）、17・三九八一（大伴家持）、17・四〇〇六（大伴家持）、19・四一七七（大伴家持）

（作者未詳）

12・三一八七、「悲別歌」）

○川の場合

（奈良朝以前）

10・二〇〇七（人麻呂歌集）

（天平五年以前）

8・一五二二（山上憶良）

（天平五年以降）

18・四一二五（大伴家持）、20・四三〇八（大伴家持）

（作者未詳）

10・二〇三八（「七夕」）

○山川の場合

（天平五年以降）

15・三七五五（中臣宅守）、15・三七六四（中臣宅守）、4・六〇一（笠女郎）、17・三九五七（大伴家持）、19・四二一四（大伴家持）

⑨　廣岡義隆氏「山川隔る恋―中臣宅守と狭野弟上娘子」、森淳司氏・林田正男氏編『万葉集相聞の世界　恋ひて死ぬとも』、雄山閣出版、平成9年8月。

⑩　以下、漢詩の引用は、『新釈漢文大系』（明治書院）によった。

⑪　稲岡耕二氏著『萬葉集全注　巻第二』（有斐閣）、2・一三五の考「長歌の連作」。